

目 次

巻 頭 言	黒田 啓史
症 例	
頰部に発生した紡錘細胞脂肪腫の1例	大西ゆりあ, 渡辺 猛寛, 白井 陽子..... 1
原発性マクログロブリン血症を背景にびまん性大細胞型B細胞リンパ腫を発症した一例	鹿野 恵, 奥田 健大, 井上 雄太, 中山 理菜, 田村 直紀 大庭 章史, 堀澤 欣史, 松井 道志, 宮原 裕子, 伊藤 満..... 4
<i>c-KIT</i> exon 10 遺伝子変異陽性の t(8;21) を伴う急性骨髄性白血病の1例	松井 道志, 日野賢次郎, 田村 直紀, 宮原 裕子, 伊藤 満 奥野 芳章.....10
特集：第32回京都市立病院地域医療フォーラム	
日本初！ 京都における病診行政連携のコロナ対策最前線 「京都府における COVID-19 入院医療コントロール：独自の取組」	山畑 佳篤.....14
「自宅療養者を守れ！ 新型コロナ訪問診療チーム」	守上 佳樹.....19
「新型コロナのこれまでとこれから」	山本 舜悟.....25
特集：第33回京都市立病院地域医療フォーラム	
〔特別講演〕 これだけは知ってほしい！小児・AYA 世代のがん生殖医療	堀江 昭史.....35
当院乳腺外科の治療戦略と今後の展望	森口 喜生.....41
当院の乳がんに対する放射線療法	平田希美子.....44
当院での乳がん看護の実践	石川 悦子.....49
当院での乳がん患者の相談支援	坂東千鶴佳.....52

第18回院内合同研究発表会集録

新型コロナウイルス専門調整部会のロジスティックス支援について

.....萱原 慎理.....55

第19回院内合同研究発表会集録

気管内挿管抜管後の嚥下障害について

.....原田みのり, 佐藤 玲, 秦 未央, 上野 啓子, 村上 瑞季, 多田 弘史.....59

MRI の吸引力についての検討

.....大町 優介, 前田 富美恵, 津川 和夫.....63

救急室における臨床検査技師の役割と活動報告

.....森 恵里子, 井上 歩, 園山 和代, 宮川 大樹, 山田 雅.....67

ペースメーカー外来における患者満足度アンケート結果と遠隔モニタリングの有用性について

.....古川 修, 石原 太輔, 乗松 康平, 山口 侑承.....71

医薬品情報担当薬剤師と病棟薬剤師間カンファレンスが医薬品副作用事例の収集に与える影響について

.....本多あずさ, 楠川 侑吾, 升田万祐子, 多留木 崇志, 村田 龍宣, 村岡 淳二.....74

造血細胞移植コーディネーターの役割と今後の課題

.....沖田 正樹.....79

外来化学療法センター栄養指導の取り組み (第2報)

.....原田 麻子, 花川 卓子, 樋口 由美, 中村 佳菜, 片山さくら, 沢本 瑞穂
中 謙太, 植木 明.....84

患者参画型転倒転落防止多職種カンファレンス

～COVID-19 患者とビデオ通話でカンファレンス～

.....大倉 香代.....89

COVID-19 ケアの経験がスタッフに与えた影響

～教育計画と看護師のモチベーション～

.....坂口かおり
西木小百合
大倉 香代.....93

CPC 報告

2021 年度 CPC 報告

.....尾松 憩, 香月奈穂美, 岸本 光夫
上野昌太郎, 馬奈木彰弘, 金星 幸栄, 北澤 良明, 島田 拓矢
嶋村 優志, 白波瀬公香, 伊藤 誠朗, 神谷 尚吾
木村 英人, 毛戸奈葉葉, 小間 淳平, 清水 咲耶..... 101

院内研修会開催記録 (令和3年度)..... 103

研究業績目録

原 著..... 150

学 会..... 159

マスメディア..... 173

巻 頭 言

京都市立病院紀要 42 巻をお届けいたします。本 42 巻には院内合同研究発表会（第 18 回 1 編，第 19 回 9 編）と，第 32 回と第 33 回の地域医療フォーラムの内容，そして診療科から 3 編の症例報告が掲載されています。いずれも力作揃いですが，フォーラムはテーブル起こし原稿をまとめた内容になっていますので，参加されなかった方には現場の臨場感も伝わりますのでぜひご一読ください。

最近の国内外を見渡しますと落ち着いた状況が続いています。新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まって 3 年が経過しました。当時，100 年前に全世界を席卷し，2 年の経過で収束したスペイン風邪と比較され，2 年も続くのかと思っていましたが，とんでもない事に，3 年経過した現在もまだ終息したとは言えない状況にあります。国は 5 月のゴールデンウィークあけに感染症法上の分類を 2 類相当から 5 類に変更すると明言していますが，5 類にしたからといって新型コロナウイルスの感染力が変わるわけではないので，少なくとも医療機関においてはしっかりとした対策の継続が必要です。

また国外では，2022 年 2 月から始まったロシアのウクライナ侵攻がすでに 1 年を経過しても終息の見込みはなく泥沼化しています。今回のロシアのウクライナ侵攻は，プーチンという独裁者の暴走としか思えません。聞くところによると，ウクライナ国内で抑圧されている人々を開放するために行っていると公言しているようですが，荒唐無稽な話に聞こえます。現実にはウクライナの罪のない多くの住民が，ロシアの攻撃によって命を落としている現実には，いかに正当化しようとも許されるものではありません。

このような不安定な情勢の中で，国内の医療体制に目を向けますと，ここ数年来，医師をはじめとする労働者の働き方改革の必要性が叫ばれています。2035 年度中には全ての勤務医の時間外労働時間を年間 960 時間以内にするという目標に向けて，いよいよ 2024 年度から，医師の時間外労働の上限規制が始まります。今まで，労働基準監督署から業務と判断されていた夜間の救急診療が，当直と認められるケースも増えていますが，帳尻合わせの働き方改革ではなく，本当の意味での働き方改革を進めていかなければなりません。取り組みの一つとして当院でも，2024 年度を見据えたこの 1 年，看護師の特定行為研修を始めに，いろいろな部門でのタスクシフト・タスクシェアを進めていく必要があります。そのためにはますます職種間の連携，協働が重要になりますが，全職員がそれぞれ高い意識を持って積極的に取り組んでいただける事を期待しています。また，その成果について公表する機会としても本紀要を利用していただければと思っています。

最後になりましたが，本紀要 42 巻の執筆，校正，編集に携わっていただいた皆さんに深謝いたします。

令和 5 年 3 月

京都市立病院機構京都市立病院

院長 黒田 啓史